

【112】

氏名	與那嶺真智 よなみねまさとも
学位の種類	医学博士
学位記番号	論医博第127号
学位授与の日付	昭和39年6月23日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	下顎骨齒槽部並びに骨梁の発生学的研究

論文調査委員 (主査) 教授 堀井五十雄 教授 美濃口 玄 教授 西村秀雄

論文内容の要旨

人胎児18体と生後間もない男屍2体を研究材料に用い、これの連続切片標本を作り、主としてヘマトキシリン、エオジンの複染色法を施して下顎骨特に齒槽部骨梁の発生学的研究を行ない次の結果を知ることができた。

1) 齒槽の初期発生は顎骨および齒胚の發育に密接な関連がある。すなわち胎生2か月の中期(胎長47mm頃)に達すると、5個の乳齒々胚がともに発生し成長を開始する。このうち乳犬齒々胚とその後方齒胚が下顎溝に嵌入し始めると同時に、下顎溝を形成する内外両板の骨壁頂縁が上方に向って活発な化骨現象を現わす。

そして胎生2か月の後期(胎長67mm頃)に至ればこの部分は明瞭な齒槽形態を現わすに至る。しかしこの時期には犬齒々胚より前方部においてはその状態を認めることができない。

2) 胎生4か月になると齒槽はますます深度を増し、齒胚は全容の約 $\frac{1}{3}$ ~ $\frac{1}{2}$ くらい包埋され、齒槽部の外板をなす骨梁は繊細で長く、かつ薄層である。内板を構成する骨梁は短くかつ一般に厚層である。

3) 齒槽部を構成する骨梁は一般に骨体骨梁と同一方向を示すため、下顎管を中心にして放射状に配列している。

4) したがって齒槽外板をなす骨梁の上端は外面に、下端は齒槽窩面に遊離し、胎生後期に至れば齒胚の上方にまで形成された齒槽骨梁は齒胚の長軸に平行している。また内板は齒胚を比較的層状に圍繞しているが顎骨全体から観察すると、いずれの骨梁走向も下顎管がその中心をなしている。

5) しかし胎生6か月頃から骨梁およびその相互間を結ぶ骨質の形成が顕著となり骨梁の配列状態が極めて複雑化し、これを系統的に識別することが困難となる。

6) 胎生3か月の中頃になり齒槽および齒胚がかなり成長する頃になると、齒槽中隔は内板から外板に向って發育する。

その走向は齒槽内板から正中側に傾斜しつつ外板に達している。したがって各齒槽窩の水平断面は近心

外側（唇側）および遠心内側（舌側）が鋭角をなす菱形を呈している。また骨梁は内側から外側に延びるにしたがって繊細となる。

7) 歯槽壁は歯胚の増大に伴って厚い部分 (i_1 , c , m_2 の内側および i_2 , m_1 の外側) と薄い部分 (同一歯胚の反対側) を現わすが、歯槽中隔の方向には変化がない。

8) 歯槽窩々内中隔は歯胚および歯槽中隔の発育が増大し、特に歯胚歯冠の範囲が制定される頃 (胎長 360 mm) から歯槽窩底の骨質隆起が始まるが、それからの発育ははなはだ緩慢で生後 1～2 年のものにおいても規則的な骨梁走向が現れていない。

論文審査の結果の要旨

ヒト胎児と幼児 20 例の下顎部の連続切片ヘマトキシリン・エオジン染色標本について、下顎骨のうちでも特異な態度を示すと推定される歯槽部、とくにその骨梁の発生を研究して、つぎのような所見をえた。

1) 胎生 2 か月末期に各例 5 コの歯胚が発生するが、乳犬歯々胚とその後方歯胚が下顎溝に嵌入し、下顎溝を構成する内外両板が化骨し始め、歯槽形態を現わすが、犬歯々胚前方はその形成がおくれる。

2) 胎生 4 か月となると歯槽は歯胚の $1/3$ ないし $1/2$ 程度を包埋し、その外板骨梁は繊細で、内板骨梁は厚い。かつ、その骨梁走向は一般に骨体骨梁と同一で下顎管を中心として放射状の配列を示すが、胎生後期となるとその配列は複雑化する。

3) 歯槽中隔は 3 か月中期ころから内板より外板に向かって形成され、その走向は水平断面において菱形を示す。歯槽窩々内中隔は胎生後期に至って歯槽窩底の骨質隆起によってその形成が開始されるが、発育はきわめて緩慢で、生後 1～2 年に至っても規則的な骨梁走向が現われない。

以上本研究は解剖学、口腔解剖学上有益で、医学博士の学位論文として価値あるものと認定する。